

受けてがれる祖父の味

小美玉市立羽鳥小学校

六年

山口

哲平

ぼくの祖父が作るお米は世界一のお米です。実石のようにつやつやにかがやいていて、かめばかむほどにあま味がでる、食べた人はみんな祖父のお米のとりこになってしまいうほどとてもおいしいお米です。

そして、その祖父が作った世界一のお米で魔法のようなおにぎりをにぎるのが、ぼくの祖母です。祖父が育てたお米で、おにぎりをにぎる祖母の顔は、とても幸せそうです。そんな祖母が作るおにぎりは大人気で、一口でもそのおにぎりを食べた人は、一しゅんで笑顔になってしまいます。人を一しゅんで笑顔に変える、魔法のおにぎりです。

祖父が一つ一つ愛情をこめて作ったお米に、また祖母が一つ一つ愛情をこめてにぎるおにぎり、ぼくは、そのおにぎりが何よりも大好きでした。

でも、もうそのおにぎりも食べることはでき

きません。ぼくの祖父が、突然この世を去ってしまっただからです。

「じいじのお米、世界一おいしい。」

何ぼいもご飯をおかわりするぼくを見て、

「今年もおいしいお米を作るから、楽しみにしてろよ。」

と、ぼくの頭をなでながら、うれしそうに笑う祖父。今年もって、約束したのに。家族のみんな、泣きました。たくさん、たくさん泣きました。

春が近づき、祖母は、今まで祖父が大事にしてきた田んぼをどうしようかとなやんでいました。

「もう、じいちゃんはいないから、田んぼがあってもしょうがないね。」

なみだをうかべ、悲しそうに祖母は言いました。「大好きなじいじが作ったお米は、もう食べられないけれど、じいじが大切に守ってきた田んぼまでなくなっちゃうなんて。ぼくのおねが、何だかチクチクいたみました。」

それから何日かたつて、田植えの時期がや  
つてきました。もう、じいじのお米食べら  
れないんだ。悲しい気持ちで祖母の家に行く  
と、  
「アアちゃん、じいちゃんの作ったお米は食  
べられないけど、じいちゃんが大事にして  
いた田んぼで、またお米を作るよ。」  
びりくりしているぼくに、祖母は優しくや  
っくりと話し出しました。今は埼玉に住んで  
いるおじさんが、いつの日か、じいじの田ん  
ぼで、じいじに負けないくらいおいしいお米  
を作ると言ってくれたこと。そして、それま  
での間、近所の人達が、じいじが大切にして  
いた田んぼを守ろうと協力してくれていること。  
ぼくは、またおねがいたくなりました。で  
も、前のいたみとはちがいます。祖父の思い  
が、たくさんの人によつて守られ、受けつが  
れているんだと、ぼくはとてうれしくなり  
ました。今年もまた、祖父の田んぼには、た  
くさんのいなほが大きく大きく育ち、中  
れたいです。